

介護老人保健施設ライフサポートねりま

症 例 概 要 利用者氏名: 50歳台 男性 要介護

病 名: 左心原生脳塞栓症、

利用サービス: 入所

経 過: 2年程前に自宅で転倒している所を発見し緊急搬送され同日に血栓回収術を施行された。術後の身体機能の向上を目的に当院回復期へ入院の運びとなりました。約6か月のリハビリを経て身体機能の向上を認めましたが身の回りADL動作の介助が残存したため11月にライフサポートねりまへ入所された。

内 容

入所当初の身体機能は、失語により頷きでの返答は可能だが単語を伴う会話では言葉が出なく意思疎通に時間を要した。そのためコミュニケーションエラーが生じた際は易怒性となる場面も見られた。身の回りADL動作は全般中等度の介助を要し車椅子ブレーキ管理や麻痺側上下肢の管理が難しかったため見守りは外すことができず特殊センサーでの対応となった。

多職種で意見交換し、親身な対応で穏やかに病棟生活を過ごせることと身の回りADL動作の介助量軽減のため身体機能の向上を目的に自主トレーニングの提供を行った。

入所から3か月経過する頃には、聞き取ることに時間を要するが発語が見られるようになりスタッフとの交流が増えたことで表情が穏やかになった。よって笑顔となることが増え易怒性はほとんど見られなくなった。また、運動意欲もみられリハビリでは長下肢装具を使用した歩行練習や起立着座練習、バランス練習を積極的に行った。余暇時間でも自主トレーニングとしてスタッフと一緒に起立着座練習や病棟内で車椅子自走練習に積極的に取り組まれた。

セラピスト: 病棟手すりを使用した起立着座運動や長下肢装具を使用した病棟内での歩行練習、病棟内での車椅子自走練習による身体機能の向上とレクリエーションやイベントによるご家族様との時間を提供することで精神賦活を図った。

看護師・ケアワーカー: 他職員が常に声掛けや挨拶をすることにより陰しい顔が和らぎ笑顔が増えるようになった。易怒性がある日は職員付き添いで西まで自走すると落ち着かれ、手を挙げ挨拶をしてくださる。実習生や普段と違う環境を提供すると笑顔が増え活気が出ている。